

メキシコと内蒙古住民の身体技法についての調査の初次的報告

— 人力運搬法と座法を中心に —

川 田 順 造

KAWADA Junzo

(事業推進担当者)

はじめに

2004年8月5日から16日まで往復の飛行時間を除いてメキシコに、9月4日から13日まで中国にそれぞれ滞在し、COE第2班の研究課題である身体技法および感性の領域についての調査を行った。きわめて限られた日数ではあったが、メキシコでは共同研究員の落合一泰氏、中国では調査研究協力者の金鋒氏と烏日娜氏という、現地事情に精通した方々のご協力のお陰で、貴重な知見を得ることができた。

調査後日が浅くまだ十分な報告をまとめることができないが、二つの調査地での課題・方法と得られた知見の基本的な問題点を提示し、批判を得て調査結果をまとめてゆくことを目的として、身体技法のうち人力運搬法と座法についての初次的な報告を行いたい。

メキシコでの主な調査地と調査内容は、以下の通りである。メキシコ・シティ（国立人類学博物館での民族誌および考古学の資料収集、民衆文化博物館での物質文化の資料収集、および前頭帯「メカバル」による背負い運搬や農牧作業のビデオからの写真撮影、国立自治大学マヤ研究センターのMario Humberto Ruz Sosa教授からの個人的教示、市場での香料、道具、工芸品等についての調査）、工芸が盛んでインディオ文化がよく遺っているといわれるミチョアカン州に長距離バスで移動し、落合一泰氏の運転するレンタカーで、モレーリア市（市立博物館、市場等での資料収集）、パツクアロ市およびパツクアロ湖周辺の農牧漁村落、陶器・銅製品・籠編み・織物等々の工房を訪ねての聞き取りと写真撮影、教会・広場・市場等での資料収集と写真撮影。

内蒙古では、北京から金鋒氏の運転する四輪駆動車で、正藍旗、錫林浩特市、東蘇尼特旗、蘇尼特旗、二連浩特市、西蘇尼特右旗などの地方政庁を訪れ、そこを起点として訪れた遊牧民の包（ゲル）での聞き取りや住居・生活用具をはじめとする物質文化、身体技法の写真撮影、市場等での写真撮影、呼和浩特市内蒙古大学博物館での資料収集、および同大学蒙古学学院布仁巴圖教授からの個人的教示など。

I 課題と方法

調査全体の課題は、メキシコと内蒙古の住民についての、道具など物質文化との関連での身体技法、および感性の領域、とくに匂いについての調査であった。

調査対象として、メキシコと内蒙古（中華人民共和国内蒙古自治区）の住民を選んだ理由は、COEの課題である「人類文化の研究」のために、COE以前から筆者が多年とってきた方法である、モンゴロイド、ネグロイド、コーカソイドの比較研究としての「文化の三角測量」の一環として、とくに広汎な地域に拡散したモンゴロイドの多様な生活圏での文化のあり方を解明する上で、メキシコと内蒙古での調査が重要で、かつ当面効果的に行いうると考えたからである。

表現型（phenotype）における一定の身体特徴を共有する有境の集団としての「人種」の概念は、現在の人類学では否定されている。だが遺伝子レベルで、ある数の遺伝子座の遺伝子頻度から、近隣結合法によって計算された集団間の遺伝距離によって、現生人類をモンゴロイド、ネグロイド、コーカソイドに大別することは科学的にも根拠があり、現生人類の地球上各地への移動や集散の過程を明らかにする上でも意味がある。三大別からさらに進んで、諸集団間の遺伝的な近縁関係を系統樹の形で推定することも可能になる（Akazawa 1996）。

3万年前から2万年前までのあいだに、ユーラシア大陸北東部からシベリア東端に進出したモンゴロイド集団の一部は、その後おそらく複数回の波になって、当時渡ることが可能だった現在のベーリング海峡を越えてアメリカ大陸へ移動したと考えられている。アメリカ大陸に移住した、メキシコの先住民も含むこれらのモンゴロイド集団は、東アジアとは著しく異なる地理的・生態学的条件のなかで、独自の文化を作ってきた。

一方、現在のモンゴル国と内蒙古の先住民であるモンゴル人は、数万年前に始まる後期旧石器時代に、モンゴロイドの祖先がコーカソイドの先祖とユーラシア大陸中部で分かれた後、初期モンゴロイド集団が東北方へ進出して形成された北方型モンゴロイドにつながる人々であると思われる（モンゴロイドの形成と展開については、赤澤威氏と斎藤成也氏から個人的に多くの貴重なご教示をいただいているが、文責は筆者にある）。モンゴル人は、中央および西アジアの住民、さらにモンゴル帝国時代には東部ヨーロッパの住民とも交渉をもち、古くから東アジアの漢人をはじめとするモンゴロイド諸集団に強い影響を及ぼしてきた。だが内蒙古の住民は、とくに19世紀末以後漢人農民の大量の入植と、清朝中国・中華民国・中華人民共和国の一部としての統合によって漢化され、遊牧生活も大きな変化を受けた。漢文化の影響はそれ以前にも、モンゴル帝国が元朝の時代に北京を都としていた時代から及んでおり、身体技法に関係の深い道具などの物質文化においても、漢文化の浸透は広く深いと見なければならぬ。

メキシコと内蒙古での、数千年を遡る先住民の由来や居住歴については、未解決の多くの問題についての議論が必要であり、現在の筆者の識見で簡明に概括することはできない。いずれにせよこの二つの地域の現在の住民は、どちらも、古い居住歴をもつ先住民と、来住歴の新しい、だが政治的には優越者となった新来民とが、長い間に生物的にも文化的にも混淆した結果としてある。新来民は、メキシコにおいては16世紀初めコルテスなどの軍事侵攻によってアステカ王国が滅ぼされてからの、スペイン人をはじめとするコーカソイド系の移住者であり、内蒙古においては、漢人として認識されている人々である。

メキシコでは、先住民とコーカソイド系移住者の混血が進んだ結果、身体特徴の上から純粋白人、混血メスティーソ、純粋先住民インディオなどと分けることは不可能である。したがって、呼称はさまざまに異なっても現在も広く認知されているブランコ（白人）、メスティーソ（混血者）、インディオ

オ（先住民）というおおまかな三分類は、社会階層としての社会・経済的な、だが必ずしも常に妥当ではない“social race”のラベリングの意味しかもっていないと思われる（落合一泰氏の個人的教示による）。文化のさまざまな領域でのスペインを始めとするヨーロッパや北米の影響が大きいなかで、カトリックの信仰が先住民に広く深く浸透していることが注目される。

モンゴル帝国は1368年、明朝によって北方へ放逐されたあと、清朝の勢力下に入ったが、中華民国時代の1921年、現在のモンゴル国の地域がロシアの影響下に独立の政治社会の単位になったのに対し、主としてゴビ砂漠以南は中国領としてとどまり、現在は中華人民共和国の内蒙古自治区、そして西蒙古は甘粛省、新疆ウイグル自治区の一部となっている。つまり、身体特徴、生活慣習、言語、世界観などを共有するモンゴル人集団は、1921年以後大きく二つの政治社会に分割され、現在内蒙古自治区のモンゴル系住民は、「漢民族」が全人口の95%を占めるとされる中華人民共和国内の少数民族の一つとして位置づけられている。とくに清朝の支配下に入ってから中華人民共和国の少数民族自治区としての現在にいたるまで、内蒙古は漢人の移住と農地化がすすみ、遊牧地の減少や草原の砂漠化、生業活動や生活全般の機械化、都市への人口流出の影響も加わって、かつての遊牧民の生活慣行は急速に失われつつある。

このような状況において、文化的に条件づけられた身体の使い方としての身体技法の研究対象として、メキシコおよび内蒙古の住民をどのように捉えるかがまず問題となる。先住民と新来民それぞれの生物的、文化的特徴を巨視的に見れば、メキシコではモンゴロイド系の先住民を、コーカソイド系の新来者が、軍事的・政治的・経済的に支配し、著しく異なる特徴をもった文化による影響を与えた。

内蒙古では、先住民、新来民ともにモンゴロイドだが、モンゴル人がアルタイ系のモンゴル語を話し、ウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギなどを飼育する遊牧を主な生業としていたのに対し、現在の中国でも明確な定義のない「漢民族」は、何よりもまずシナ・チベット系の中国語を話し、漢字と漢字に担われた文化を共有する人々の漠然とした総称だという見方もある（橋本・鈴木1983；岸本1998）。また、古代黄河文明を受け継ぐ「中原」の政治社会とその文明の担い手が核となった、漢字使用を有力な類別規準とする集団が「漢民族」であるとする見解もある（広島市立大学国際学部教授、薬竹民氏の個人的教示による）。筆者が調査中に聞いた現在の内蒙古住民の意識では、漢人はモンゴル人から見れば、煉瓦造りの家に住み、農業にすぐれ、豚を食べる人々とでもいうことになる。最後の点は、モンゴル人と漢人が互いに悪口を言い合うとき、相手を羊臭い、豚臭いというそうだが、モンゴル人が羊肉を常食するが伝統的にブタは飼育せず肉も食べないのに、漢人は豚肉を好む食習をもっているところから来るのであろう。この点は、COE第2班の研究課題である感性の領域、とくに匂いをめぐむ問題としても興味深く、次の機会の報告書で取り上げたい。

このような先住民と新来民の関係のほか、二つの地域に共通する文化変化にかかわる状況として、1960年代頃から世界の多くの地域で顕著になった生活全般の電化、機械化、そしてテレビをはじめとする通信機器や、自動車、モーターバイクの普及にともなう通信・輸送全体を包含するヒト・モノ・情報の接触と移動の、範囲の拡大と密度の増加がある。農耕・牧畜の、企業化・集中化・大規模化と同時に他方では脱専業化・分散が進み、出稼ぎが増え、運搬手段の転換（メキシコでは前頭帯背負い運搬による重い荷の長距離運搬の減少ないし消滅、内蒙古では運搬獣としての馬の役割の消失と馬飼育の衰退）、流通の多様化、広域化が急速に進んだ。

こうした歴史的経緯も考えるならば、「先住民の伝統的慣習」といった復元不可能の純粹状態を想定し、それについての知見を現在の住民についての調査から行うことの不適切は明らかだ。それゆえ今回の調査では、現在の道具など物質文化と身体技法についての観察と聞き取りを行い、比較的新しくもたらされたことが住民によっても確認されているもの（20世紀になって普及したことが明らかで、メキシコ村落での西洋式の靴、内蒙古遊牧民の生活にかなり古く漢人から取り入れられたとされる肩運搬用の担い棒など）を、単に除外するのではなく、それが導入された理由・経緯を聞き取りによってチェックしながら、それとして記録した。その際の考察の資料は、筆者が直接調査を行った、メキシコについてはミチョアカン州の一部、内蒙古については、中北部と西北部の遊牧民社会の一部での知見であるが、メキシコやモンゴル社会全体の資料も、それが妥当と個々に判断できる範囲内で、参照しながら解釈するという方法をとった。

したがって、メキシコについては、ミチョアカン州とは先住民の系統が異なる地域の、例えばマヤ族などについての民族誌的、考古学的資料も参照しており、その結果得られる知見をモデル化したものは、トウモロコシを主食作物とする「メソアメリカ」という、文化の交渉・変動の場としての地域（地域概念については、川田 2004b:75-126）における、モンゴロイドの一分枝がコーカソイドの一分枝との交渉や電化・機械化の時代を経て現在ある状態から、研究者が比較の視野に立って抽出した、あくまで作業仮説としての理念型モデルへと収斂させることを目的としている。内蒙古についても同じことが言える。筆者の今後も続ける予定の補足調査や関連資料の探索、他の研究者の成果を参照することによって、メソアメリカ・モデル、モンゴル・モデルを、これまで筆者が調査にもとづいて精練してきた、フランス・モデル、日本・モデル、西アフリカ内陸・モデル、（地域名称に付着する特定性のイメージを消すために、それぞれをモデル A、モデル B、モデル C と呼んで比較したこともある（Kawada 2000））と比較可能な形での、理念型としての操作モデルにまで精練することができるようにすることを、筆者は研究上の努力目標としている。

今回の調査対象地域としてメキシコと内蒙古を選んだ、前述した「当面効果的に行いうるから」という理由は、メキシコについては、文化人類学の領域におけるメキシコ研究の第一人者である落合一泰氏が共同研究員として協力して下さること、アメリカ大陸ではメキシコを筆者は短期間ではあるが二度訪れていることや、アフリカを主な研究対象地域として選ぶ前、筆者がメキシコに関心をもっていたことなどから、僅かではあるが予備知識があったこと、メキシコは考古学遺物、民族誌資料が豊富に利用できることなどである。内蒙古については、これまでも日本とアフリカで身体技法について共同調査を行ってきたキネシオロジーの芦澤玖美氏と楠本彩乃氏が、共同研究員として身体計測の面で協力して下さること、芦澤氏と中国で共同研究を行ってきた、自然人類学の金鋒氏が調査研究協力者として現地調査に全面的に協力して下さること、内蒙古出身で内蒙古の遊牧民についての優れた修士論文を、筆者も指導教員の一人として広島市立大学に提出した烏日娜氏が、現地調査に通訳・助手として同行して下さることなどの理由による。

II 予備的考察

今回の調査結果のうち、この報告書で暫定的なまとめを試みる、人力運搬法と座法について、調査

地の生業や物質文化全般との関連での予備的な考察をはじめに行いたい。

身体技法としての人力運搬法を考える前提条件において、今回の調査対象であるメキシコと内蒙古の住民は、いくつかの重要な点で、対照的な状況に置かれている。第一に、スペインによる征服以前のメキシコ先住民社会には、アメリカ大陸の他の地域と同じく、車輪などの回転原理を応用した道具がなかったのに対し、内蒙古も含むモンゴル社会は、モンゴル帝国以前からウマを牽引獣とする車輪文化では、世界でも有数の先進地域だった。第二に、スペイン以前のメキシコ先住民社会には、大型家畜は全く存在しなかったのに対し、モンゴル社会は、ラクダ、ウマ、ウシなどの大型家畜とヒトが共生するような社会だった。第三に、メキシコは土地の起伏がかなり激しい地方も多いのに対し、内蒙古では、土地の大きな起伏はあるものの、一部を除いて、住民の生活は平坦な草原で営まれている。

生業活動および衣住などの日常生活にかかわる物質文化としては、人力運搬法では、運搬される物、運搬具の材料と加工法、衣服、履物などが、座法に関しては、住居の床面と人体の関わり方、座具、衣服、履物などが重要である。物質文化以外の社会関係、価値観の面では、人力運搬法、座法の双方にとって、男女の分業、男女・長幼の作法のあり方などが、かかわりをもっている。

以下、この予備的報告の趣旨にもとづき、各項目を二つの地域で比較対照しながら検討する。

III 人力運搬法

中米原産の植物である、リュウゼツラン科リュウゼツラン属のシザル（サイザル）アサ *Agave sisalana* Perr. や、強度はやや劣るが同属の植物エネケン（ヘネケン）*A. fourcroydes* Lem. の葉からとれる長さ1m余りの繊維は、メキシコでは先住民によって、綱や荒布の原料として広く用いられてきた。これらリュウゼツランの、強くしかも糸に紡ぐ必要のない天然の長繊維が、いたるところで容易に手に入ることは、この繊維で編むか織った前頭帯「メカバル」（女性がいざり機で布を織るときタテ糸を張っておくために、正座した腰に後ろからまわす帯も、落合氏によるとメカバルと呼ばれるという）による背負い運搬を発達普及させる重要な自然条件だったといえるだろう。

この方法によって、オレンジを一杯つめた大籠（約80kg）のようなかなりの重さの荷を、年の行かない男の子でも坂道を登って運ぶことが可能だったのである（図1～6）。前頭帯による背負い運搬が、起伏の多いこの土地で、車輪も荷駄獣もなかった先住民が荷を運ぶための主要な運搬手段だったことは、考古学資料（図7）や、スペイン人との接触直後に描かれた図像資料からも知られる（図8～11）。図8、9を見ると、旅に出る者も、前頭帯背負い運搬で旅の荷を運んだと推測される。スペインとの接触以前からの男性用の履物は、図8～11にも描かれているような、野生の鹿の皮で作る「ワラチェ」と呼ばれる一種の草鞋で、女性は原則として裸足だった。

前頭帯を用いず、布や袋や紐を肩から首の前にまわして背負う運搬法も、16世紀前半に先住民が描いたとされている図像資料（図12）や、現在博物館で展示されている民俗資料（図13）や、実際に運搬している人々の姿（図14～17）によって見る事ができる。

他にも、単独に、あるいはこれらと併用して、手提げ運搬も見られる（図18～23）。嬰兒の運搬法としては、布にくるんだ横抱き（図24～26）を、背負い（図16）よりは多く見かける。

以上に示した資料に、図示できなかった観察や聞き取りによって得た知見、落合氏による教示をあ

わせて検討すると、まだ仮説的にだが、次の点を指摘できる。

① 年数は確定できないが、10年位前までは、メキシコの村落どこでも容易に見ることができたという前頭帯メカパルも、それをを用いた運搬も、筆者は今回の調査旅行中（同行の落合氏が努力して探して下さったにもかかわらず）、市場でも、村落部で訪ねた家でも一度も見ることができなかった。図1～6に示したような、斜面の多い地方での生業活動と結びついた、主として男性の、前頭帯によるかなりの重量の荷の、ある程度長い距離の背負い運搬は、各種の車や機器の普及にともなって、地形から不可欠な地域を除いて、急速に消滅したのではないと思われる。

② それに対し、主として女性の、あまり重くない荷を近い距離運ぶための、布でくるんで首の前で支える運搬法は、図12に見るような、スペイン人との接触の時代から、大きな変化を受けずに現在も行われているように見受けられる。

③ 図18～23に見るような、柄のついた籠やプラスチック容器を、曲げた前腕にかけるか手で提げて運ぶ方法は、②の方法とも相互排除せず、それに付け加えるか単独で、中身の出し入れが容易である利点もあって、比較的新しく普及したのではないかと思われる。古い時代の図像資料には、手提げ運搬のための容器は見られないが、この種の運搬法、とくに曲げた前腕に籠の柄をかける運搬法は、曲げやすく表面が滑らかな柳の枝を用いた柄付き籠の使用と結びついて、スペインも含むヨーロッパ社会で、古くから広く行われてきたものである（川田1992 [1988]: 79～91）。ヤナギ科ヤナギ属 *Salix* L. は、主として北半球の温帯、亜寒帯の湿地に多く自生するが、メキシコでの分布や利用については、筆者は未調査である。図18, 23に見る柄付き籠の材質についても知る必要がある。ただ、プラスチック製の柄付きの籠や桶が多いところから見ても、スペインをはじめとするヨーロッパの影響がもとになった、比較的新しい習慣ではないかという仮説を当面、検討の対象として出しておくにとどめる。ちなみに、野生植物を用いた精巧な籠編みが発達している西アフリカ内陸社会でも、柄付き籠は、フランスなどヨーロッパの影響によって新しく生まれたものである（Kawada 1986 [1975]; 川田1992 [1988]）。

④ 曲げた前腕に籠の柄をかける運搬を除けば、人力運搬において、荷の重心は比較的低く、上体はやや前屈みであるように見受けられる。腕、肩が支えの中心になっているヨーロッパ型（川田1995）よりは、腰中心の日本型に近いように思われる。だが、重心が低く設定され、仙骨支えが多い日本式背負い具（河原1999; 川田2004a）と比べれば、前頭帯による背負い運搬や首の前で布や紐を結ぶ背負い運搬では、背面上部への加重が大きいのではないかと思われる。いずれも、履物や歩容、農業など他の生業活動における身体の使い方ともあわせて、検討課題である。

⑤ 西アフリカなどで人力運搬法の中心をなしている頭上運搬は重要ではなく、それに合わせた運搬具が作られてもいない。また、天秤棒などの担い棒を用いた肩運搬については、手がかりがなく、落合氏も見たことがなく、担い棒を指す言葉も知らないという。先スペイン期のマヤ地帯の塩田で、横方向の天秤棒で、海水を満たした土器の壺をインディオの男が運んでいる様を想像で描いた絵があるが（Andrews 1997: 38-39）、根拠は不明である。同じ塩田に関する論文の数ページ後に、白人の男が首の後ろの肩に、横方向に短い天秤棒を担いで海水を入れた桶を運んでいる絵が描かれているが（Andrews 1997: 43）、このような担い棒運搬は西ヨーロッパでは広く行われており、これからの類推で、先スペイン期のマヤ人にも、同様な棒運搬をさせた絵を描いたのかも知れない。

メキシコについて検討してきたこととの対比で、内蒙古遊牧民の人力運搬法を見ると、次の点を指摘できる。

① 各種の車や、荷物を運ばせるに適した大型家畜が日常生活と密着し、少し前の時代までは男女とも子どものときから馬に乗り、平坦な草原を生活域とするモンゴル人にとって、多少とも重い荷を人力で、ある程度の距離を運ぶということは、考えにくかったのではないと思われる。運搬するというほどではない近距離を移動して使う、熊手様の道具で牛糞をすくって投げ込む、紅柳の枝で編み、革ベルトや麻縄で背負い片方の前腕で引く、土地によって名称がさまざまに異なる、口の広い（直径50～60 cm）浅い（深さ30 cm 前後）籠（図27～29）や、片方の肩にかける大きな把手のついたやはり紅柳で編んだ、漢人から取り入れたという、牛糞を運ぶ籠（図30, 31）など、いずれもかなり粗造りの籠が、背負い籠のすべてとあってよいだろう。他に、薪の束を麻縄で片方の肩にかけて運んでいる女性を見た（図32, 33）。ヤナギ属の木、とくに紅柳の枝を編んで作る、前腕にさげるように柄のついた籠は、モンゴルのものではなく、漢人のものだという。

② 頭上運搬、担い棒を用いた肩運搬は、いずれもないとあってよい。西蘇尼特右旗の包（ゲル）で、今度の調査旅行中ただ一度だけ、前後にかつぐ天秤棒（モンゴル語で「ダムナル」という）を見た。長さ119 cm、太さ一端の径3.5 cm、他の一端の径4.5 cmの撓わない木の丸太の両端に、長さ60 cmの針金を吊し、木桶で水の運搬に使う（図34）。土地の人は、天秤運搬は漢人起源だという。

③ メキシコで女性が用いる、荷を大きな布でくるみ、布の両端を首の前で縛って支える方式の運搬法は、内蒙古には見られない。メキシコ先住民は、リュウゼツランの長繊維だけでなく、木綿の短繊維を紡いだ綿糸の織物にも優れていたが、内蒙古の遊牧民社会では、フェルトは作ったが機織りはせず、大判の布で荷をくるむような人力運搬は行われなかったようだ。その一方で、メキシコ先住民社会にはなかった、嬰兒の両脚をそろえて伸ばし、布で固く包んで舟形の揺籃状の木枠「ウルグイ」（揺れるように湾曲した底にはフェルトが貼ってあり、中には粟の殻を入れた布団を敷く）（図35, 36）のなかに寝かせて紐で固定する、一種のswaddlingがモンゴル社会にはあり（ただし、ヨーロッパでのように、脚を紐で密に固く巻くことはしない）、赤子の運搬法と子守りに関しては、二つの社会には大きな違いがある。

④ 内蒙古でも自動車やオートバイ、モーターバイクの普及は著しく、都会でも馬車を使わず、草原でも馬や馬車を人の移動や荷の運搬に用いなくなったために、馬の需要がなくなり、馬を飼育して殖やすことに意味がなくなった。草原の包（ゲル）を訪ね歩いていても、馬にめぐり逢うことはめったにない。その点では、人や物の移動・運搬をめぐる状況は、スペイン人との接触以前大型荷駄獣をもたず、前頭帯による背負い運搬を発達させたメキシコ先住民が、やはりモータリゼーションの進むなかで置かれている現状と、似通ってきたといえる。

IV 座 法

住居の床面と人体との関係では、メキシコは住居内が土の床であるが、モンゴル遊牧民の包では、床面は土床のことも、フェルトや絨毯を敷いてあることもあるが、外の履物のまま入る。包では入り口正面に40 cm位高くしつらえられ、オンドル式に暖房され絨毯が敷かれていることが多いが、包

によっては必ずしも高くなっていない「デードゥ・ソーダル」(上・席)があり、ここでは靴(図37, 38)は脱ぐ。正式には主人の座であるが、改まった場でなければ、家族の女性も自由に腰掛けたり、上にあがって正座していたりする(図39)。

北側の主人の座から、南ないし南東の出入り口に向かって、中央の炉をはさんで右側が男の空間で、男性が座り、かつては包の内壁に沿って馬や弓矢にかかわるものが置いてあったが、いまはテレビ、ラジオなどを乗せた台があることが多い。左側は女の空間で内壁に沿って調理道具などが置かれている。男女とも、改まって着座するときは片膝を立て、もう一方を正座のように、あるいはもっと内側に向けて折り曲げて座る。男女で状況によって膝を立てる足の左右が決まっているという人と、どちらでも良いという人とがおり、それぞれに理由付けがあって、現在の筆者には判定できない(図40)。

日常は、男性は木の股を利用して自分でつくる四脚の小さい腰掛けに座り、女性は床面に片膝立て座り「チョムチョイフ」か正座「スグッチュ」で座る。男はあぐら「ジャビルジュ」のこともある。男が正座をするのは、戦の捕虜になった時とか、改まって大切な頼み事をする時などであるという。女性はあぐらをかいてはならないとされている。しゃがみ「オチョイフ」もしてはならないという人もいるが、洗濯のとき、牛の乳しぼりのとき(図41, 42)、羊毛の刈り取りのとき(図43)には、実際にはしゃがむことが多いようだ。休息のときのしゃがみは男女ともによく見かけるが、土地の人たちの意識では、しゃがみは漢人の習俗だという。服装は、日常生活では男女ともズボンに革またはプラスチックの長靴「ゴトル」で、服は多様だが、裾が膝下までである、女性の方が長めの上着を着ている。

メキシコについては、考古学資料の人像から見る限り、考えうるすべての座法を網羅しているときえ思われるほど、多様である。結跏趺坐を連想させられるものさえあるが(図44~46)、それらは特殊な人物を表しているのであろう。屋内の日常生活においては、男性が低い腰掛けに座り、女性は土間の床面に正座(いざり機での機織り(図47)、低い竈での調理(図48))や突き膝(低い石の摺り臼での製粉作業(図49))で座ることが多いようだ。

西アフリカ内陸社会では、男女とも作業姿勢に、両脚をそろえて、あるいは交差させて前に投げ出し、背を後ろにもたせかけない、いわゆる「投げ足」が極めて多く、土地の人にとって安定した楽な作業と休息の姿勢として行われている(Kawada 1991)。これは体形からいっても、ネグロイドには楽で、モンゴロイドには苦しい作業姿勢だ。メキシコでは稀で、土器成形(図50)や背をもたせての糸紡ぎ(図51)などに僅かな例を見いだせるに過ぎない。

逆に、モンゴロイドには比較的楽だと思われる正座(図52, 53, 54)やしゃがみ(図55)は、メキシコでも、とくに女性には頻繁に見られる。

今後の課題——むすびに代えて

調査で得られた資料の整理もまだ不十分で、関連する文献の参照もほとんどなされていない状態で、調査事項のうち、①人力運搬法、②座法の2点についての初次的な検討を試みた。本稿では、身体技法の前提となる諸条件がさまざまな点で対照的な、モンゴロイドの2地域を対比させながら検討したが、これに筆者がこれまで調査してきた、ネグロイドやコーカソイド、同じモンゴロイドでも日本人

や「漢人」の、同種の身体技法を参照すると、さらに探索すべき事柄が浮かび上がってくる。

人力運搬法については、頭上運搬が支配的な西アフリカ内陸のネグロイドを別として、力をかける中心が肩と腕にあるコーカソイドに比べて、日本人は腰に重点があり、それは筆者が「膝歩行」と名付けている、膝を軽く曲げ、上体をやや前傾させ、踵を引きずるようにして進む歩容と、物質文化としては踵が固定されていない履物と結び合わされている。人力運搬法との関係でいえば、荷をつけた背負い具の重心が、肩または背中上部にかかるか、腰または背中下部にかかるかとの関係がある。メキシコの前頭帯による背負い運搬では、重心の位置は日本の多くの背負い具のように腰の仙骨支えほど低くはないが、肩運搬でもない。

また、メキシコにはおそらくなく、内蒙古でも漢人から取り入れたとされる天秤棒を用いた肩運搬で、日本人の天秤棒が、トネリコのように取って撓う棒の前後に長い綱で荷を吊るし、やや上体を前屈させ腰で調子をとって運ぶのに対し、いみじくも「軛」(yoke; joug d'épaule) と呼ばれるヨーロッパの天秤棒は短く、肩に乗せる部分はしっかり固定されるように彫りくぼめてあり、直立して両脇に下げた桶を両手で持って歩く。つまり真っ直ぐに立って肩と腕の力で運搬するのである。「漢人」の担い棒については、筆者は重慶の荷運び人「棒々軍」の使う、太い竹を平たく削った「扁担」(ほとんど撓わない)による肩運搬を観察し、自分でも試み、扁担を買って持ってもいるが、担い棒と人体との関係において、扁担は日本のものと、コーカソイドの「くびき」の中間の性質をもっている。モンゴル人は私の見た僅か一例では、漢人に倣って固い丸太の担い棒の形をこしらえ、メキシコ人はおそらく取り入れなかった。

同様に、比較の視野で他に興味をひかれる人力運搬法は、把手付きの籠を、曲げた前腕に掛けて物を運ぶ方法である。これは、明治以前の日本にはおそらく全くなく、現在でもきわめて希にしか見られない。日本人の身体の使い方の体系に、馴染まないのであろう。「漢人」は、紅柳の枝で編んだ把手付きの籠を愛用しているが、モンゴル人は筆者の見た限り取り入れていないし、メキシコではおそらくヨーロッパ人がもたらしたものを、図 18, 20 に見るように実践している。モンゴロイドのなかでの、この変差の底にあるものは何か、これをシステムとしての身体技法解明の、一つの切り口にすることはできないだろうか。

座法については、メキシコ人もモンゴル人も、日本人と同様、多様な座法を実践している。コーカソイドのうちヨーロッパ人は、座具としての椅子は文化的意味に応じて著しく多様化させたが、座法については、現代ヨーロッパ人の多くは蹲踞も正座もできず、きわめて単調だ(川田 1992 [1988])。ネグロイドは投げ足座法を好むが、正座はできず、蹲踞も得意ではない(Kawada 1991)。モンゴロイドの正座は、アメリカ大陸の先住民で筆者が直接見ているのは、メキシコ以外では、ブラジル中西部のナンビクワラの女性だ。住居のなかだけでなく、森林で全裸でマンジョーカを掘るときにも正座をする(図 56, 57)。そして、大きな縦長の籠を前頭帯で背負う(図 58)。

正座を含む、座る技術の多様性は、身体技法の面でモンゴロイドを、とくにコーカソイドとの対比で、人類の視野で位置づけてゆく一つの手がかりになりうるかも知れない。座る技術を身体と道具(座具)の関係として、今の段階ではまったく仮説的にでしかないが、検討の叩き台としてモデル化してみるとすれば、「文化的意味に応じて多様化された、身体の技巧に依存することの大きい座法と、座法を補う、無いか、あっても単純な座具(脇息、円座、座布団、簡単な腰掛けなど)」(モンゴロイ

ド・モデル)が、「文化的意味に応じて多様化された、身体の技巧に依存することの少ない座具(椅子)」(コーカソイド・モデル)との対比で、考えられないであろうか。その際、斎藤成也氏の遺伝距離に基づく系統図では、コーカソイドのうちでもモンゴロイドに近く(Saitou 1995: Fig. 6)、日本人の座法や座具にも大きな影響を与えたインド人の座る技術や、唐代以後家具の多様化とともに腰掛けが重要になったと思われる「漢人」の座法が、問題にされなければならないだろう。

引用文献

Akazawa, Takeru

1996 "Introduction: human evolution, dispersals, and adaptive strategies", in Akazawa, T. & Szathmáry, E. J. E. (eds.) *Prehistoric Mongoloid Dispersals*, Oxford Science Publications, Oxford University Press, Oxford, etc.: pp. 1-37.

Andrews, Anthony P.

1997 "La sal entre los antiguos mayas", *Arqueología Mexicana*, 5 (28): pp. 38-45.

Kawada, Junzo

1986 [1975] *Technologie burkinabè* [le titre original de l'édition 1975: *Technologie voltaïque*], Musée National, Ouagadougou.

1991 "Notes on the 'Techniques of the Body' among West African peoples", *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 99 (3): pp. 377-391.

2000 *The Local and the Global in Technology*, World Culture Report Unit, UNESCO, Paris.

川田順造

1992 [1988] 「身体技法の技術的側面：予備的考察」, 『西の風・南の風：文明論の組みかえのために』 pp. 64-122, 東京：河出書房新社.

1995 「基層文化としての身体技法：17世紀以後のフランスを中心に」, 川田(編)『ヨーロッパの基層文化』 pp. 177-203, 東京：岩波書店.

2004 a 「課題と方法」, 芦澤玖美編『生業活動に伴う身体技法と体形の関連性に関する研究』平成12年度～平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書：pp. 1-8.

2004 b 『人類学的認識論のために』, 東京：岩波書店.

河原雅典

1999 『伝統的背負い梯子「背板」はどのように身体にフィットしているか』, 九州芸術工科大学へ提出し受理された博士論文(未刷).

岸本美緒

1998 「「中国」とは何か」尾形勇・岸本美緒編『世界各国史3 中国史』 pp. 3-23, 東京：山川出版社.

Saitou, Naruya

1995 "Genetic Affinity Analysis of Human Populations", in *Human Evolution*, 10 (1): pp. 17-33.

橋本萬太郎・鈴木秀夫

1983 「漢民族とは何か」橋本萬太郎編『民族の世界5 漢民族と中国社会』 pp. 2-33, 東京：山川出版社.



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6

民衆文化博物館（メキシコ・シティ）での公開循環映写ビデオ（撮影地は、落合氏によると、おそらくベラクルス州に近いワステカ地帯、撮影年は不明）からの筆者による撮影写真



図 7 メキシコ西部出土の土器壺. 国立人類学博物館（メキシコ・シティ）図録 *National Museum of Anthropology* (English Edition), n. d. : p. 147.



図 8



図 9

「旅に発つ者が家族に別れを告げる図」 *Códice Florentino*, in *Artes de México*, Número. 141, 1971: Fig. 58, 59.

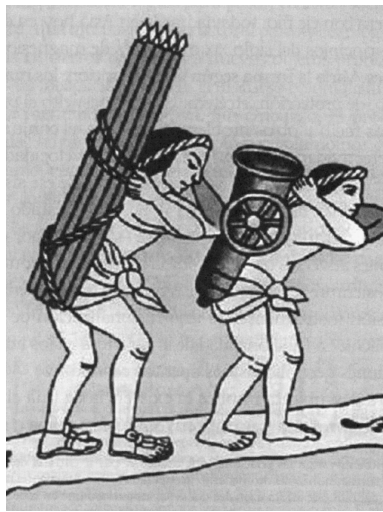


図 10

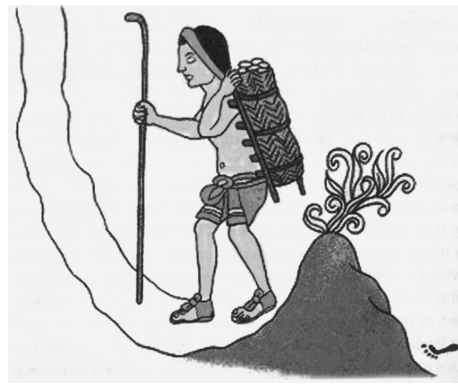


図 11

Lienzo de Tlaxcala (detalle), in E. Florescano e V. G. Acosta (Coordinadores), *Mestizajes tecnológicos y cambios culturales en México*, Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social, México, 2004 : p. 268, p. 272.

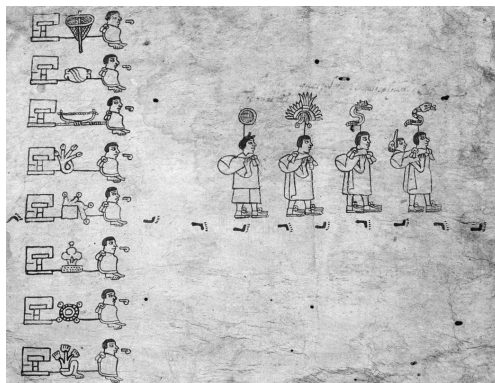


図 12 *La Tira de la Peregrinación* (detalle), in J. Galarza e K. M. Libura, *Para leer la Tira de la Peregrinación*, Ediciones Tecolote, México, 2004 : p. 20.

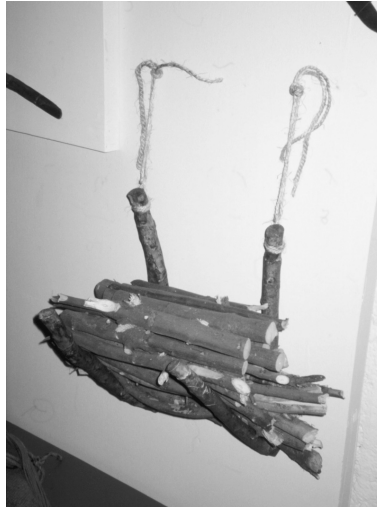


図13 薪背負い具（両側の紐を首の前で結ぶ）。採集地・年代不明，民衆文化博物館（メキシコ・シティ）で筆者撮影



図14



図15



図16



図17

ミチョアカン州パツクアロ市の街頭で筆者撮影



図 18



図 19



図 20



図 21



図 22



図 23

ミチョアカン州バツクアロ市の街頭で筆者撮影



図 24

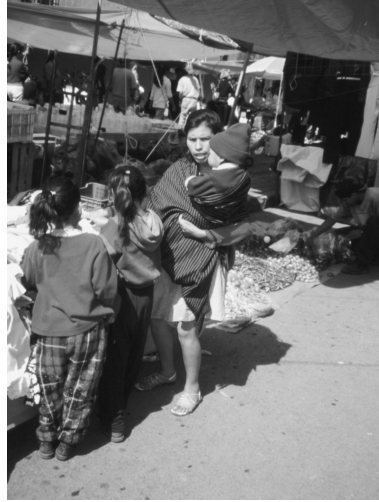


図 25



図 26

ミチョアカン州パツクアロ市の街頭で筆者撮影



図 27

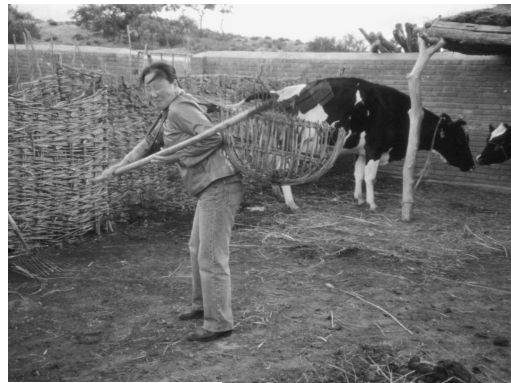


図 28



図 29

蘇尼特旗で筆者撮影



図 30



図 31

正藍旗で筆者撮影，31は金鋒氏撮影



図 32



図 33

蘇尼特旗で筆者撮影

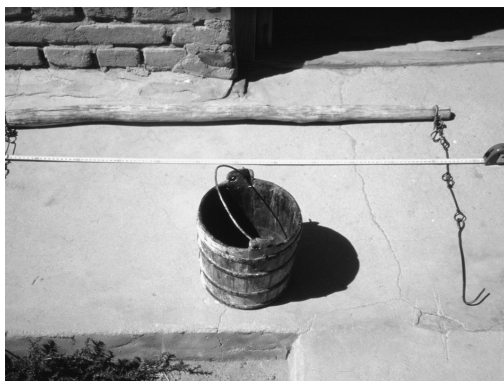


図 34 西蘇尼特右旗で筆者撮影

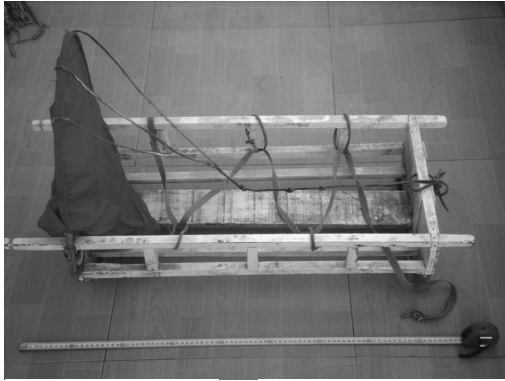


図 35



図 36

蘇尼特旗で筆者撮影



図 37



図 38

モンゴル靴「ゴトル」, 西蘇尼特右旗で筆者撮影



図 39 東蘇尼特旗と蘇尼特旗のあいだの遊牧民包で筆者撮影



図 40 包内での主人・男女の座法の仕来りを示す。
布林特古斯主編『蒙古族民俗百科全書・精神卷』,
赤峰, 内蒙古科学技术出版社, 1999年: 58頁

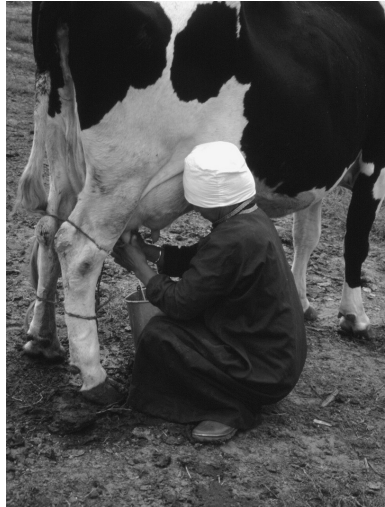


図 41

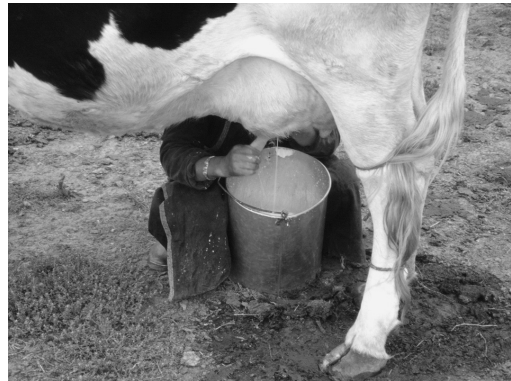


図 42

正藍旗で筆者撮影



図 43 西蘇尼特右旗で筆者撮影



図 44 中部ペラクルス出土の若い女性像. 国立人類学博物館 (メキシコ・シティ) 図録 *National Museum of Anthropology (English Edition)*, n. d. : p. 82.



図 45 サポテカの火と熱を司る老神. 国立人類学博物館 (メキシコ・シティ) 図録 *National Museum of Anthropology (English Edition)*, n. d. : p. 82.



図 46 テオティワカン出土の粘土像. 国立人類学博物館 (メキシコ・シティ) 図録 *National Museum of Anthropology* (English Edition), n. d. : p. 34.



図 47 E. Florescano e V. G. Acosta (Coordinadores), *Mestizajes tecnológicos y cambios culturales en México*, Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social, México, 2004 : p. 213.



図 48 *Artes de México*, Revista Libro Número 36, 1997 : p. 14.



図 49 *Artes de México*, Revista Libro Número 36, 1997 : p. 16.

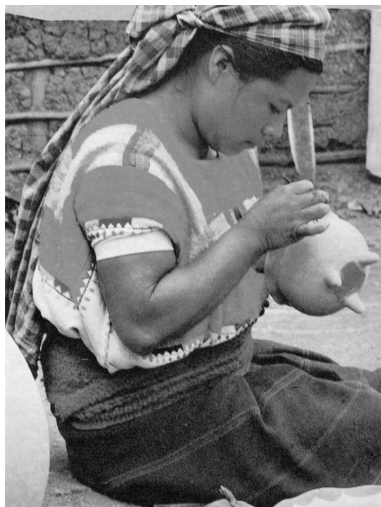


図 50 “Craftsman of the State of Mexico”, in *Estampas Mexicanas del Siglo XIX -Mexican 19th Century Prints*, Collection Banco de México, n. d. : p. 79.

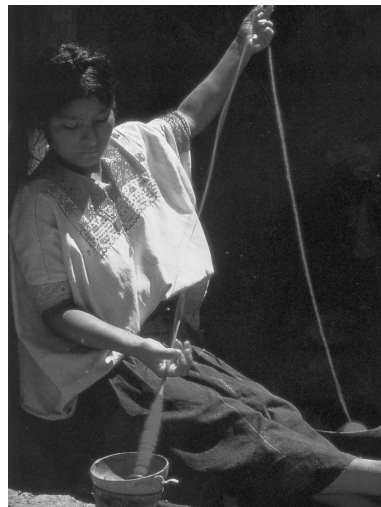


図 51 マヤ地帯のチアパスで落合一泰氏撮影, *Arqueología Mexicana*, 5 (28), 1997 : p. 64.



図 52



図 53

ミチョアカン州パツクアロ市の街頭で筆者撮影



図 54 *Códice Mendocino*, f. 68, in E. Florescano e V. G. Acosta (Coordinadores), *Mestizajes tecnológicos y cambios culturales en México*, Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social, México, 2004 : p. 210.



図 55 ミチョアカン州パツクアロ湖畔の漁村で、水揚げされた小魚を干す村の女性。筆者撮影。



図 56



図 57



図 58

ブラジル、マトグロソン州ワスス村で、1984年筆者撮影